

学校現場から悲鳴が聞こえる

第20回 「小学校の英語教育の現状は」

学習指導要領の改訂のたびに小学校における英語教育が話題になっています。20年前、総合的な学習の時間の取扱いの一項目として英会話活動が始まり、10年前の改訂では外国語活動が新設され、総合的な学習の時間と切り離し5・6年生で年間35時間の外国語（英語）活動が始まりました。そして今度の改訂では3・4年生で週1時間（35時間）の外国語（英語）活動、5・6年生は週2時間（70時間）の教科「外国語」が行われることになり、群馬県では2018年度から先行実施されるということです。

あるIT企業は社内では英語のみ使用とニュースにもなりましたが、小学校での外国語教育は、「グローバル人材育成」をめざす財界からの強い意向で導入されてきました。ますます過熱する外国語教育ですが、現場ではこの動きはどのように捉えられているのでしょうか。

Wさん 英会話活動が始まった当時はALT（外国人言語指導助手）に丸投げの状態で、教師は傍観者でした。教育委員会から派遣されてくるALTはほとんど日本語が話せず、大学を卒業したばかりの若い人が多く、ハイテンションな言葉遊びやゲーム的要素の濃いものでした。半年の勤務でお金を貯めガラパゴスに夢を叶えに行くといった人もいました。ALTとのコミュニケーションがうまく取れず、不満や不安がありました。

2008年の改訂時には文科省から副読本「Hi-Friends」が配布され、指導内容も統一されました。2013年頃からはALTも専門の人材派遣会社を通して採用され、英語を母国語とした日本在住の外国人がALTとして派遣されるようになってきました。

記者 教師とALTの二人で授業をすすめるのですか。

Wさん ALTにはネイティブ・スピーカーとしてT2（助手的立場）の働きを求められています。彼らにT1（指導をリードする立場）の働きを求めてしまう現場も多くありました。ALTがT1となっている授業では、アクティブな活動が多く、

あいさつ、色、曜日、数、果物や学用品の名称、好きなもの、施設名などを英語で学び、子ども達も楽しそうでしたが、系統的でねらいをもった学習指導としては不十分でした。毎年、どの学年もその繰り返しで、はたしてどのような力が身についたのか疑問です。

Yさん 外国語教育の専門の方が、「第二言語」学習と「外国語」学習の違いについて話されていました。英語以外の母語を持った人が英語社会に移住し、英語を生きていくのに必要な第二の生活言語として学ぶのが「第二言語」で、一方、生まれ育った母語の社会に生活していて、母語以外の言語を学ぶのが「外国語」学習というわけです。今のやり方はどうやら「第二言語」学習のスタイルが主流になっているようで、週1時間、目と耳だけで、時には歌やゲームなどもやりますが、ワイワイやっても、その授業が終われば英語を使う必要性のない学びや生活に戻るようになります。

記者 そのことについて長く高校で英語を教えてきた経験からみてどうですか。

Xさん 文科省の研修ガイドブックの「小学校外国語教育の基本理念」：「小学校におけ

る外国語教育の新しい段階への一歩」で、次のように書かれています。「一方で課題もある。外国語活動で、音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないなど、外国語活動での学びがうまく中学校英語教育に生かされていないことである。また、外国語活動は「慣れ親しみ」であるがために、2年間外国語活動を経験して何ができるようになったかを児童が自覚しにくいいため、抽象的な思考が高まる段階である高学年児童には、より体系的な学習が求められる。」

文科省自ら、慣れ親しみだけでは外国語（英語）を習得する力にはつながらないと率直に認めています。新学習指導要領では外国語活動そのものの見直しにつながらず、3・4年生への前倒しと5・6年生への教科「外国語（英語）」へと、より一層困難な道を選んでいると言わざるを得ません。

記者 根本的な問題が指摘されましたが、Wさんの学校では現在どのように行われていますか。

Wさん 週1日派遣されてくるALTと担任が協力して行っています。英語の免許を持つ教員がいないので、英検2級を持つ教員がT1として5・6年生の英語を週4時間担当しています。1・2年生は月に1時間、3・4年生は週1時間、担任とALTとで授業を行っています。1～4年生は、今年度はALTがT1的に学習をすすめてきましたが、来年度からは3・4年生も担任または英語専科がT1として授業する可能性が高くなっています。学級の実態を踏まえた指導計画の的確な実施という観点からは、担任あるいは専科の教員が授業をすることが望ましいと思いますが、英語の教授法を学んでいない者にとっては負担感が大きく、話すこと（発音）にも自信がありません。教わる

子どもがかわいそうです。少なくとも英語の免許を持つ教員を配置してもらいたいものです。

Xさん 小学校英語の問題点をあげると、一つは教育課程全体のなかに外国語（英語）の学習を取り入れることの意味、他教科との関連や中学校での学習への関連について、十分な議論や検証があったとは思われません。二つには「入門期」が一番大切なのに、専門的な知識や技術を持った指導者を十分に用意することなく見切り発車ですすめていることです。突然、英語の指導をするよう強いられた担任の困惑は想像に難くありません。超多忙な日々を送っている先生方にさらなる重荷を負わせていると言えます。Wさんの学校だけではなく県内のほとんどの学校が同じ問題をかかえているのではないのでしょうか。

Wさん 聞くこと、話すこと、書くことの言語活動が十分にでき、定着するのか疑問です。今年度、専科の教員がT1となって系統的に指導した5・6年生ではある程度できたようですが、ALTがT1となって授業した3・4年生では、単発的な学習を過ごただけです。子ども達は入学前から母語である日本語を身につけてきますが、こうした音声言語をひらがな、カタカナとして学び、次に漢字として覚え、毎日、日常生活のなかで話し、書くことで獲得していきます。こうした言語能力をたった週1回の活動で身につけようということ自体無理と思います。

Xさん そのとおりですね。子ども達は自然に、無意識のうちに身につけていく母語・日本語ですが、この「聞き・話す」ということの裏には、子ども自身の欲求や感情と同時に、身の回りの人や物事を認識したりいろいろ考えたりしています。成長とともに、この心のなかの※「内言」の世界が徐々に作られていきます。小学校

に入学すると、「書いたり読んだりすることば」を学びながら「社会的なことば」を身につけ、認識や思考力を伸ばし、「内言」の世界も広く深くなってきます。子どもがより高次の精神活動ができるようにしていくためには小学校段階での母語・日本語の自覚的・体系的な学びが極めて重要です。4・5・6年生段階でたっぷり時間をかけて日本語を学び、語彙を増やし、概念体系や論理的思考・抽象的思考の基礎、感性や情緒などを豊かに発達させていくことが大切と考えます。貴重な時間を割いてまであえてこの時期に外国語（英語）の学びを取り入れる必要性は無いですし、発達段階を踏まえて中学校から外国語を学び始めるほうが「言葉の学び」としてより意味あるものになると考えます。

記者 小学校の教科英語では、語彙数が 600～700 語、中学校では今回 1600～1800 語と増えていて、加えると 2200～2500 語となります。現行では中学校のみ 1200 語ですから 2 倍になります。自分が学んでいた頃を思い出すと恐ろしい数ですが、こなせるのでしょうか。

Wさん 今年度、週 1 時間外国語活動の時間を増やすために、ほとんどの小学校では 5 校時前の 15 分間を週 3 回、帯の時間で取り、3 回で 1 単位時間（45 分）として確保しました。そうしないと週 29 時間もある週の時数が 30 時間になり、月曜日まで 6 時間授業になってしまうからです。（月曜日は職員会議等があり通常は 5 校時まで）本校ではその帯学習を英語ではなく、国語や算数でカウントし、見た目 29 時間（実質 30 時間）としました。苦肉の策です。英語活動が 1 時間増えたことで、現場では時間的な負担感、他の教科へのしわ寄せがあります。

語彙の問題ですが、言葉に対する興味関心が高く、日本語の理解も早い能力の

ある子どもは、英語の時間でもその能力を発揮できるでしょうが、日本語学習だけでもうまくいかない子はどんな気持ちでいるのだろうかと思ってしまう。小学校で英語の学習が始まり、親の関心も高まっています。教育熱心で経済力のある家庭は英語塾に通わせたり英検を受けさせたりと英語活動に遅れまいと必死です。しかしそこまで対応されない子も多く、ますます学力の二極化がすすみ、中学校に入学するときには英語嫌いや抵抗感のある子どもが増えているように思います。

記者 教師の負担増、子どもの学習量の問題等が明らかになりました。群馬ではこの春から前倒しで実施されますが、少なくとも学びやすい教育条件整備が必要のようです。



※内言：内語ともいう。発声を伴わずに自分自身の心のなかで用いる言葉。特に社会的交渉の機能をそなえる外言と対比される。他人との意志伝達のためではなく、思考の用具として、自己の行動を抑制、統御、調整する機能をもつとされる。

【ブリタニカ国際大百科事典より】